

# はっぴなクマザ 1986 3 No. 72

事務局：長崎市 津田尚美方（〒）

編集人：葛西よう子 長崎市（〒）

一九八六年の初達ばっくワマンの目標は、この長崎市内に住んでいて、ユニークな活動をしてる女性の人達と逢いたい。何か組織の一員である、というよりも、自分で考え、自分の体を使って独自の活動をする人達に出会い、話を交し、それと私達も元氣になりたい。そこでこれから一年、一月に一人おつ、インタビューを送ります。

タラシ情報誌「ザナガサキ」編集長  
川良 真理 さん

（原爆公園に程近い、若い女性に人気の店）  
「タシマ」の一階、キッチン・田島にあらわれた川良さん、カールしたヘアスタイルの髪が、フワフワと顔をとりまく、フワフワと、なやなやと、（「ザナガサキ」は五十六年十月創刊、半年目にして入社、それ迄は読者として色々文句をつけていたのが、内部の人となりを知った。当時、スタッフのほとんどが他で職を辞して片手間にやっていたのが、今は都度、三千部と見え、十名の社員が働く所迄、のびて来た。スタッフの平均年齢、三十五

位、女子がほとんど多いかな。男女同賃金、もちろん仕事内容も男女二諸。

雑誌の頃、そのものが男女、どちらにも同一比重のもの、しかし、原爆、水害、まじりな企画に取り組み時、中心となるのは女性のほうが多い。

「エッセイ・ファン」の喫茶店の同じ棚に並んで、手にとる、もうめなうてはならない、表紙、記事のアイディアが、とても大切になんてくる、全員の会議で、いい話し合える、あるが、ワマンと、話が盛り上がる、時に、良いアイディアが出て来る様だ。

最初は信用が、よく取材が、むずかしい、が、五年に、つみると、市内のお店が信用、と、なる様になった、人とのつながりが、大切、手間をおし、か、人と、接して、いる、と、向こうから情報、だ、と、来る、様になる。

スタッフの中、から、例えば、「映画情報、な、う、う、さん」といふ風に、スベリ、リストと、育て、て、行、三つ、と、なる。

日頃、を、方面に、ア、テ、ナ、を、上げ、物、を見、よう、と、努力、と、すると、む、く、い、れ、る、事、が、多、い、例、え、ば、中、古、バ、イ、ク、市、場、の、情、報、を、の、せ、は、い、め、た、事、は、ヒ、ット、だ、つ、た、中、古、バ、イ、ク、市、場、は、ひ、つ、そ、り、と、動、き、て、解、放、さ、れ、な、か、た、事、に、気、は、し、た、



あゝあゝと頭をもたげて来た。下の垂ん坊が保育所へ入れた。その頃、実父バヤソレ「ザナカサ」に人手が足りない。どう情況がおこつた。昭和七年、まだかたまろとい

おはいくうでも かき廻せそうだとたのが魅かだった  
他の人は編集部に残ることも 私は五時になると原稿を  
持ち帰ると近所の寝た後仕事を一たん コツをとって  
夫の帰りがおそろいのも フラスだった

~~~~~

編集長となつて不愉快だといふ新聞のインタビュ―  
某大新聞のインタビュ―をうけた。五十才位の男の記者だつた。

十六才の結婚、十七才の出産、十八才の編集長就任、キワモノとして大々記事が出た不愉快な事心からいえない。それにひきかえ、昨年、大々扱われたA紙の記事は正しく、ありのままを、事実として書きとられ、その姿勢がうれしかった。若い、女性の記事で、さすがと思つた。十六才で結婚（相手の人は十八才、もう働いていた）した時、私自身は人のやうな事をしよう。十六才では主婦はつ

受験中心の高校生活もあまり楽しくなく、好き嫌いと

如三才女也。方城樂山。自今。丁巳。乙丑。霜。

連字届を出し、叔父の書に常とて、袴袴してこれなし、さうリストだ長父も、相手の両親も自由

は自分でするやうにうけられ  
ちやんとしなせぬと出合

そへに暮す。と、うのか。若し、入道、後、の才、一歩、だと  
思ふ。男子も家庭科を必修にする。事とか。男の子の  
育つ方とか。う事に。今、とても興味を拂つてゐる。

上のまぶもうすぐ一年生になる　すきをみくは茶碗洗ひ  
洗濯物をまをみを手はじめに　家事をさせてゐる。

男と女はちがうものだから、底にならないうちに、  
 せめて、逢坂 16 当世住宅事情  
 二人旅り相續へ養子縁組と計画  
 小川郁代  
 一月十三日付  
 「朝日新聞」の  
 見出し

遠くの親戚より近くの他人とよく

付す、おのち親戚が遺産相続となると、目の色を変えて  
いふ来ることをよく耳にする。

最近結構をしち有職婦人（独身女性）或は離婚して  
入居する女性がふえてゐる。

それ等の女性が老後に何かに他人同士、共同生活を始めたい  
どんな問題にぶつかるとあるのであらうかと考えてみた。

これは一月二十三日付朝日新聞に「それぞれの選択」と

女同士でくすりには  
小川郁代

二人旅り相續へ養子縁組を計画  
 せむの選択 16 当世住宅事情  
 ともに58. 11 仕事27 同月  
 一月は三日  
 「朝日新聞」の  
 見出し

二人旅り相續へ養子縁組を計画  
 せむの選択 16 当世住宅事情  
 ともに58. 11 仕事27 同月  
 一月は三日  
 「朝日新聞」の  
 見出し

二人旅り相續へ養子縁組を計画  
 せむの選択 16 当世住宅事情  
 ともに58. 11 仕事27 同月  
 一月は三日  
 「朝日新聞」の  
 見出し

題して「当世住宅事情」16.16の記事が掲載された。

それによると、他人同士のA子さんとB子さんは、生事の関係で、二人はアトリエ兼住い、を建てる共同生活をしてゐる。

敷地約百平方メートルに、鉄骨三階建て、不動産登記は各、三分の一として連名。

共同で暮らす以上は、家事も諸至費も各々分担してゐる。

しかしどうも分が悪い事もある。しかし彼女達は、結ぶつきのベランダ、あつた利害の致であり、カバラスが五分と五分であると考え、この口に出さない。

ところが、先に死した場合、遺産相続などの様にすゝかかゝつてゐる。

又、ある時、A子さんが病気で入院した。B子さんが手続をとらうとした所、親族、又は市長の承認が必要と言われた。病状にしても「家族でなければ教えられるまい」とも言われた。ところが、他人同士が信頼し合ひ、共同で生活をしてゐる。所詮他人同士、世の中「家族」か「血縁」でしか法律的には認められない仕組になつてゐる。

それなら、養子縁組しか、今の所考えられないと手許に

届出の用紙をおく、考慮中である。

三の様は問題にぶつた時、一人では解決出来ない。妨げになる様々の原因を採る研究機関のようなものが必要だ、と切に思う。その上に慣習を変え、運動も必要であつて、法律の改正に迄、押さへ込める様な運動をする事も必要であらう。あるは法律(現行の)以外の制度を作る。先に向、女性、が束になつて知恵を出し合う事だ、女性、が束になつて行ける道に、つなびて、あつて、と考える。

――そして現行「民法」を――

「相続人」とは、配偶者と子、孫、親、兄弟姉妹。

夫婦と子供が、家族の場合、夫(妻)の死後、その財産の半分は妻(夫)が、残る半分は子が相続する。子供がいない場合は、妻(夫)に、子、親もなくなつた時は妻(夫)に、子、夫(妻)の兄弟姉妹に、子、相続は配偶者間では「課税額」の半分、又は四千万円までの相続なら、半額、夫(妻)の財産は共同で築いたもの、とされる。内縁関係の男、女は他人と同じ、配偶者は法的婚姻関係という。